

弥生時代の銅鐸の文様の源流について

末房由美子

On the Origin of the Patterns on Bronze Bells in Yayoi Period

Suefusa Yumiko

Abstract

In this paper I have researched decorations and designs on bronze bells in Yayoi Period in comparison with those on bronzes in Southern China from Warring States Period to Western Han. First, in the combination of the horizontal belt with the vertical belt, bronze bells have something in common with bronze drums of *Shizhaishan* type (石寨山型銅鼓), those of some cowrie-containers (貯貝器) and those of some tub-shaped containers (桶). Second, in geometric patterns, bronze bells have few in common with bronze drums. On the contrary, they have a lot in common with the other kinds of bronzes, for example, *niu zhong* (鈕鐘), *bo zhong* (罇鐘), cowrie-container, tub-shaped container and sewing box (線盒). Third, most of these bronzes are discovered at the distribution of bronze drums, but the rest at that of *Yue zu* (越族) bronze culture. Finally, in ship design, bronze bells have more familiarity with the ship design in “Turret Ship Brick Painting” of Han Period in Southern China than with that in bronze drums at Han Period in Southern China.

This study will give us much information about the origins of decorations and designs on bronze bells in Yayoi Period.

はじめに

一 銅鐸の実態概要

二 銅鐸の装飾

(1) 鐸身の基本的な装飾構造

(2) 実際の装飾状況

三 銅鐸と中国南方青銅器との装飾比較略述

(1) 銅鐸の基本的な装飾構造に見られた区画分割方式に関して

(2) 幾何学文帯

(3) 絵画文における船文について

おわりに

はじめに

弥生時代は水稲耕作の開始と金属器の使用の開始をほぼその始まりの指標とし、終焉は大和地方に巨大な古墳が出現した頃である。紀元前3世紀から紀元後3世紀、即ち中国の戦国時代後期から西晋時代あたりまでの600年余りの間である。

この時代に日本にあった青銅器には、剣・矛・戈・鏃・鉋・鋤・鏡・銅鐸・巴形銅器・銅釧などがある。鉋など実用的に使用された工具はあまり長く作られず¹⁾、武器も実用というよりは威信材として作られていた。鉄器が同時に登場しているため、青銅器は実用面はあまり期待されなかったのであろう。弥生時代の青銅器は、特殊な在りかた、即ち威信材または祭器という方向で発達している。

日本の青銅器は、巴形銅器など大陸にも半島にもない列島独自の青銅器もあるが、殆どのが元来大陸にあったものであり、列島に入ってから後今述べたような方向で更に発達する過程にあって、形状に変化をきたしている。中でもその度合いが最も大きいのが、ここで取り上げる銅鐸である。この日本の銅鐸と同形同工の青銅器は、中国でも朝鮮半島でも見当たらない。銅鐸は、墓ではない特別な場所から共伴物があまりない状態で出土している場合が多い。その用途は一般に農耕儀礼用の祭祀器と解釈されている。また古墳時代には殆ど作られていない。即ち、銅鐸は、元来中国の青銅器に由来すると思われるが、変化を遂げたその器形は、日本独特であるだけでなく、弥生時代特有の青銅器なのである。弥生時代は列島に権力が芽生え、小国が分立し統一国家の形成へと飛躍する時代とも重なり、銅鐸はそうした構造と何らかの結びつきがあったとも考えられ、とりわけ深い関心が持たれている。

それだけに長い研究史もあり、各方面から詳細な研究がなされていることは言うまでもない。器形の源流、分類と編年、製作技術方面、金属内容に関する理化学的研究、精神文化方面、文様方面などからなされている。

しかし、これまでにあまり研究されていない方面が全くないわけではない。

それは文様方面に属することである。銅鐸の表面には様々に文様が施されている。その装飾法（文様の配置状況など）、文様の意匠、これら二方面における源流問題である。従来の文様方面の研究では、その意味問題、絵画表現法といった関心が主であり、その“源流”という視点は本格的に取り組まれているとは言い難い状況にある。しかし、元来日本にあったものではないのであるからその装飾法や文様をどこから得たのか、という問いは、ごく自然な疑問ではないだろうか。この問題は、日本の銅鐸の形成過程また構成要素などに触れることでもあり、大切な視点であると思う。

無論、この問題はなおざりにされてきたわけではない。むしろ、銅鐸の起源問題に絡めて従来から触れられてきた²⁾。何故なら、この問題に関しては、銅鐸の祖形は朝鮮小銅鐸（図1）であり、朝鮮小銅鐸は更に中国遼西地域の所謂遼寧青銅器文化の鈕鐘に淵源があるとする説が最も有力であるが、これらの青銅器は無文であるからである。当然ながら、そこでは、銅鐸の有文であることと異なることが必ず指摘される。しかし文様以外の要素、中でも器体全体の形

態を主軸にその起源問題は検討され、結局文様方面の検討には余力が注がれていない³⁾。

起源問題を離れたところでは、即ち当初の段階を経て銅鐸制作がより進んだ時期の銅鐸に施された文様に関しては、個別的な文様の中国南方青銅器との共通性（例えば高床倉庫など）などを指摘するものはあるが、その取り上げ方は非常に散発的であり、またその指摘も中国南方青銅器を全体的に見通した上で導かれたものではないように見受けられる。

銅鐸の文様の源流問題は、考えられる様々な源流を想定して検討すべきであろう。ここではその一環として、所謂商周青銅器を研究対象としている筆者は、ここ数年来長江流域を中心とした中国南方青銅器に関心を持ちつづけてきた流れから、中国南方の青銅器を取り上げ、それらと日本の銅鐸との初歩的な比較を試みた。その結果、両者には文様装飾方面で少なくとも親近性があることが窺われた。ここではその点を具体的に指摘し、意匠設計上の源流問題を考える手始めとしたい。

一 銅鐸の実態概要

はじめに、銅鐸の一般的状況を把握しておきたい。制作時期・総数・一組の数・大きさ・基本的形状・分類と年代・文様の施文部位と題材の大別及び表出状態などである。

銅鐸の製作開始時期は、鑄型の出土状況の研究から、近畿地方では弥生時代前期末（紀元前2世紀前半）⁴⁾、北部九州では弥生時代中期後半とされ⁵⁾、終焉時期は弥生時代末の紀元後3世紀である。これまでに発見された点数は約600点である⁶⁾。2点一組である例が多いが1点のみの場合もあり、また3点一組の場合もある⁷⁾。大きさは10cm 台の小型から150cm 近い大型までであるが、20cm から60cm 台あたりが多い⁸⁾。小型から大型化へと向かう。その基本的形状は、平頂・平口の鐸身に、舞と称する平頂上に半環形の鈕、鐸身から鈕にかけての外周に鱗が付くというものである。また有舌を基本としており、鐸身内部には下方に音を出す際に舌の当たる所と考えられる突帯がめぐっている。また、舞に2個の欠孔、鐸身に両面とも上方左右に1個ずつ全部で4個の欠孔がある。更に口部にも同様に両面とも左右に1個ずつ全部で4個の切り欠きがあることがある⁹⁾。銅鐸の分類は、吊り手の機能性の程度が反映される断面の形状から、4類に大別される分類法が¹⁰⁾広く支持されている。I式が吊るす機能が最も高く厚みがあり、この段階が最古段階であり（図4）、その後時間の経過と共に吊るす機能が弱まり平たくなってゆく過程がII式からIV式で示されている。II式を古段階、III式を中段階、IV式を新段階（図2）としている。これらは更に細分されるが、ここでは大筋のみとする。この4式に年代を与えるとほぼ次のようになる。I式即ち菱環鈕式は、弥生時代前期後半で前3世紀—前2世紀、II式即ち外縁付菱環鈕式または外縁付鈕式は、中期前半で前2世紀—前1世紀、III式即ち内外縁付菱環鈕式または扁平鈕式は、中期後半で前1世紀—後1世紀、IV式即ち突線鈕式は、中期末から後期で1世紀—3世紀である¹¹⁾。

施文部位は、鐸身・鈕・鱗の両面である。舞に施される場合もある。主要な装飾部位は、鐸身である。どの部位も文様は両面で少し異なる。装飾文様の種類は幾何学的文様と絵画的文様に大別され、殆どは突線で表される。

二 銅鐸の装飾¹²⁾

先ず、鐸身を中心とした銅鐸の装飾の概要である。基本的な装飾の構造と、それを基にした実際の装飾状況に分け、次のように整理した。

(1) 鐸身の基本的な装飾構造

鐸身全体は、横帯文や流水文で水平に分割するか、袈裟襷文で縦横に分割し4乃至6個の左右対称の小区画を作り出すもので、横帯文系・流水文系・袈裟襷文系の三つの系統に大別される(図4)(図3)(図5)。

横帯文系の横帯には、斜格子文のほかに綾杉文・鋸歯文・連続渦文など各種の幾何学文が充填される。

流水文系は様々な流水文があるだけでなく、中に横帯文を含むものもある。

袈裟襷文は縦列が左右中央の3本、横列は上中下の3乃至4本である。縦列は左右の列は幅が狭い。縦列横列には普通層序の区別がある。横列が表層にあり、縦列は底層にある。つまり縦列は上端から下端まで貫通することがなく、上端も下端も横帯が通っている。変則的に中段の位置で縦列が表層にある場合も上端下端は横列が表層である。この点は中国の場合と明確に異なる点である。中国の所謂鐘類の縦横の区画分割のある文様は、甬鐘の鉦の部位にある同様の区画分割の構造に淵源しており、中軸の縦帯は中でも銘文が刻まれる“鉦間”の痕跡であることをかなり崩れた装飾でも忘れていないからである。そこでは縦帯が装飾部分の上から下まで貫通し、横帯の方が真中で中断されている(図6)。これと異なる日本の銅鐸の縦帯のあり方は、中国中原の伝統とは無縁であると理解される。この袈裟襷文には普通、斜格子文が充填されている。中には縦横の交差する個所に木の葉文などを施す例もある。

どの文様系統にもほぼ共通しているのが、鐸身装飾部分の最下段である。ここには鋸歯文帯とその下に何本かの突弦文を廻らす文様帯が置かれている。この一組の横列の文様帯の下は裾と称され、通常無文である。

以上のように、鐸身は基本的に、縦横の帯による幾何学的構成とその帯自体に施された幾何学文(図7)、これらによって装飾されている。

この鐸身に鱗や鈕が加わる。鱗には鋸歯文、鈕には鋸歯文・連続渦文・綾杉文など様々な二方連続文様が施される。鱗や鈕のこうした装飾法も、どの文様系統にも共通している。

なお、鋸歯文帯は、常に三角形の内部には平行する斜線を引くハッチングが施されている。一方の列だけである場合と、向かい合う二列の鋸歯に相異なる方向のハッチングが入る複合鋸歯文がある。

(2) 実際の装飾状況

鐸身の装飾は、①この基本的な装飾構造のみで装飾する場合、②基本的な装飾構造に絵画文様を加える場合、③基本的な装飾構造に幾何学文を加える場合、この三様がある。

①の場合。I式からIV式のどの形式にも見られ、しかも圧倒的多数に及ぶ。但し、三大別された文様の系統は常に並存していたわけではないので、その装飾の内容は各形式によって異なっている。

最古の銅鐸であるI-1式は、この装飾に属している。文様の系統は概ね横帯文系で、横帯の中には鋸歯文・斜格子文・綾杉文等が充填されている。中川原銅鐸・東京国立博物館 No. 35509銅鐸・荒神谷5号銅鐸(図4)等が挙げられる¹³⁾。

I式には袈裟襷文系も存在するが、流水文系は見られない。

II式では、三系統の文様がすべて存在するが、袈裟襷文系の割合が大きい。

III式では、横帯文系が姿を消している。流水文系も非常に少なく、袈裟襷文系が圧倒的多数を占めている。

IV式では、この“基本的な装飾構造のみによる装飾”にほぼ統一される。結局この装飾法が、銅鐸の装飾の主流であるばかりか到達した姿であることになる。また、このIV式に隆盛を誇る文様系統は袈裟襷文系である(図2)。流水文系は激減し、しかもIV式の早いうちに消滅している。

②の場合。全体に少ない。

最も早いのはI-2式であるが、例数は非常に少ない¹⁴⁾。その施文位置は袈裟襷文による小区画内に納まるもので、この施文位置が通例となるIII式の場合の先駆例となる。

II式では絵画文様は横帯文系・流水文系・袈裟襷文系すべての系統に施される。流水文系では施文のある一帯は横長であり、時間の経過を表現したり自然な描写がしやすい画面を提供している(図8)。描かれている小動物や人間の相互の距離や密度は自然であり、図案のような規則性とは無縁で、所謂絵画の範疇で捉えることが可能な内容が認められる。II式では、そのほか施文位置が区画外である場合も少なくない。また本来無文である裾や幾何学文帯のなかにも施文されている。文様の種類も多く、点数も多い。絵画文様の最も盛んなときであり、変化に富んでいる。

III式では絵画文様は殆どが小区画内に入る。絵画的には構成も形象も単純であり、図案文といった範疇であるため整然としている(図7)。

IV式では絵画文様は皆無に近い状態になる。但し、有文の例では施文位置が区画外や幾何学文帯の中にあるものがあり、意外にも整然と枠内に納まるものではない。

絵画文様のある銅鐸は8点に1点の割合と少数である¹⁵⁾。中には同じ鋳型を使ったと思われるものがあり、同じ絵画文様の銅鐸が複数発見されているから、絵画文様の種類は点数より少ないことになる。種類も点数も少数であるが、II式という早い形式に多出し、III式をほぼ下限とする点で、源流問題を考える上ではより多くの手懸りを提供するものであろう。

③は、袈裟襷文で区画された中に蕨手文や四頭渦文などを飾るものである(図9)。例数は余り多くない。大体III式までである。

①の“基本的な装飾構造のみによる装飾”に統一されるまでの期間、この期間は試行錯誤の期間として理解される。試行錯誤期間は、広く取るとIII式までであり、いまして限定するとII式までである。

以上から、銅鐸の装飾文の源流の探索は、I・II式銅鐸の文様を中心にIII式銅鐸の絵画文様を交え、これらと中国戦国・前漢時代あたりの青銅器とを比較することであろう。

三 銅鐸と中国南方青銅器との装飾比較略述

中国南方に於いて当該時期に作られた、銅鐸同様特別に埋納された形跡の多い青銅器、銅鐸に準じる器形や装飾上各様に似た点のある青銅器、即ち銅鼓・罇鐘・鈕鐘・貯貝器・桶・筒・盒などとの簡単な比較を、二で示した銅鐸の装飾の特徴に沿って試みる。

(1)銅鐸の基本的な装飾構造に見られた区画分割方式に関して

銅鐸同様特別に埋納された形跡が多く、またその装飾に区画分割方式が見られるなど日本の銅鐸と共通点がある青銅器は、中国少数民族の銅鼓（以後、銅鼓とのみ記す）である。中でも、雲南万家壩型と雲南石寨山型の銅鼓である。万家壩型は春秋早期或はもう少し早い時期から戦国末にかけて作られ、石寨山型は戦国から後漢初期にかけて流行した。石寨山型には石寨山系と東山系があるが、分布範囲からここでは石寨山系を対象とする（以下単に石寨山型とする）。銅鼓の装飾は鼓面・胸部・腰部（図14参照）に施されるが、ここでは一部を除き鼓面の装飾は省略する。

万家壩型は無文から始まるが、文様が施されるようになって非常に簡単である。胸部の最大径の位置を基準に分けられる形式分類4式を追って見てゆくと次のようになる。I式は無文（図10）、II式（図11）は腰部が全体に縦の突線によって区画分割され、腰部底辺は勾連雷文や雷文もどきの幾何学文の入った横帯文が一周する。区画内は無文である。但し、腰部・足部内壁に簡単な幾何学文や爬虫文がやはり突線で施されていたりする。III式では胸部の最大径の位置が中部より上方に移った点で分けられるが、文様方面の変化は、区画内・内壁とも無文、腰部底辺は突弦文が二、三周するというだけで前式より飾り気がないもの（図12）と、区画内・内壁とも無文は変わらないが、腰部底辺がII式同様の幾何学文帯、縦の区画線が各様の折れ線の入った幾何学文帯となる例（図13）が出現している。IV式（図14）は腰部底辺の横帯が五層から成る例も出ているが、一番の変化は区画内の中央あたり外壁に簡単な幾何学文が施される例が出現したことである。その意匠はII式内壁の幾何学文様の類である。ただし、依然として無文のままのものもある。

石寨山型（図15）は、万家壩型の最晩期のIV式を早期とするものであると考えられている。戦国時代に既に、腰部底辺の横帯とそこから立ち上がる縦の区画帯は、複数列から成る太い帯状を呈している。各列には異なった幾何学文が充填されている。区画内には儀式や舞踏の場面が表される。范線のある区画内は無文である。区画内を、更に上下二段に分けるものもある。前漢中晩期の広西西林銅鼓¹⁶⁾はその例である（図16）。

胸部には船文が施される。鼓面との境界にも幾何学文が充填された横列が幾重もめぐって太い横帯を形成している。

腰部底辺の太い横帯内最下段は、鋸歯文帯の下に二、三列の突弦文をめぐらすのを常として

いる¹⁷⁾。

この装飾法は、石寨山型銅鼓の装飾として定着するだけでなく、他の器種にも採用されている。銅鼓型貯貝器では当然のことであるが、全く器形の異なる器種にも取り入れられている。例えば戦国中期の雲南呈貢天子廟出土の五牛桶¹⁸⁾ (図17) では身部の上段を銅鼓胸部に、下段を銅鼓腰部に見立て、銅鼓と全く同じ装飾法を展開する。前漢の雲南江川李家山出土の紡織貯貝器¹⁹⁾ (図18) では、幾何学文を充填した幾重もの縦横の帯で幾何学的に区画構成するだけで絵画文様は皆無であるが、それが石寨山型の典型的な装飾法に淵源していることは一目瞭然である。このように、この装飾法は当該地域の戦国から前漢時代の代表的な装飾法として定着しているようである。只、銅鼓でない器形の場合、上記の五牛桶・紡織貯貝器では最下段の横列の文様帯が銅鼓の場合と異なっている点が注目される。この点に注意して他の貯貝器や筒・盒などのそれを見るとやはり銅鼓と異なっており、銅鼓の最下段のこの文様帯の意匠は、銅鼓固有の意匠であると思われる。また、銅鼓型貯貝器では、銅鼓を上下に2個重ねて1個の貯貝器とするものがある²⁰⁾。縦横の幾何学文帯が袈裟禪文のような趣を与えている。

この装飾法は中原に範を求めたものではなく、当該地域の創案であろう。それは中原にはない独特の器形であることに加え、この装飾法の成立した戦国時代は、当該地域は中原の影響下になかった筈であるからである²¹⁾。

日本の銅鐸は、簡単な図案文の範疇に入る絵画文様は万家壩型のそれに似ているが、各種の幾何学文を充填した縦横の帯で区画し構成する手法は石寨山型に近い。

以上から、銅鼓と日本の銅鐸の装飾設計上の共通点は、①先ず無文の状態に留まらなかったこと、②無文から有文化の過程では幾何学文の入った横帯文の採用が優勢であること、③基本的な装飾法（縦横の幾何学文帯による区画分割方式・最下段の横列の文様帯の構造）、④伝統的な中原の意匠設計法に影響されていないこと、などである。

但し、③で挙げた区画分割方式は、銅鼓から始まったとしても他の器種にも採用されていたわけであり、銅鼓とだけ結び付く装飾法ではなかったということも覚えておきたい。

(2)幾何学文帯

銅鐸に見られる主な幾何学文帯のうち、綾杉文・斜格子文・連続渦文・鋸齒文・流水文の各帯について見てゆく。銅鼓に注意しながら、その他の青銅器を必要に応じて取り上げる。

綾杉文帯：春秋から戦国の雲南万家壩類型銅鼓内壁²²⁾、戦国の雲南祥雲検村で鈕鐘²³⁾ (図19) や呈貢で五牛桶²⁴⁾ (図17)、前漢の雲南広南・広西西林で銅鼓²⁵⁾²⁶⁾ (図16)、前漢晩期の四川会理で鈕鐘²⁷⁾などに見られる。鈕鐘では横帯を成す。銅鼓には縦帯によく見られる (図15)。

斜格子文帯：春秋から戦国の雲南楚雄万家壩で銅鼓内壁・銅釜・銅斧²⁸⁾、雲南江川李家山23号墓銅鼓²⁹⁾、戦国の雲南祥雲検村で鈕鐘³⁰⁾ (図19)、四川茂県で罽鐘³¹⁾ (図20)、ほか西周から春秋の福建南安で銅戚³²⁾、春秋戦国の江西横峰で銅鈴³³⁾などに見られる。銅鼓にはあまり見られない。

連続渦文帯：戦国の雲南で祥雲の鈕鐘³⁴⁾ (図19)、呈貢天子廟の貯貝器³⁵⁾、前漢の雲南晋寧・四川会理で鈕鐘³⁶⁾³⁷⁾、雲南江川で紡織貯貝器³⁸⁾ (図18) などに見られる。銅鼓には見られ

ない。銅鼓では似た文様はあるが、印紋陶器の文様の系統である。中心に点が打たれた小さい円圏が横列に並ぶものと、そうした円圏と円圏の間を斜線で結ぶものがあり、後者は一見似ているが、このように全く異なる構造である。

鋸歯文帯：先ず、全体的に見て銅鐸と全く同じ鋸歯文帯は見られない³⁹⁾。三角形の中にハッチングが施されている例は鼓面の太陽文にあるが、全体が円形にまとめられているわけで簡単に結び付くものではない。銅鼓に普遍的に見られる鋸歯文帯は小さく長目の三角形を押印したような方式であり、戦国時代から常用されている。また、単なる折れ線状の鋸歯文は、斜格子文帯で挙げた戦国の四川の鐸鐘⁴⁰⁾ (図20) や、戦国後期からやや下あたりの雲南牟定福土龍の鈕鐘⁴¹⁾等に見られる。

流水文帯：前漢の雲南江川で紡織貯貝器⁴²⁾に見られる。一段だけで単純であるが、銅鐸の流水文とよく似ている (図18)。同じ雲南江川李家山で戦国の線盒⁴³⁾ (図21) に、平行する線をS字状や8の字状、或は円形に曲げる文様が施され、流雲文・旋文などの名で呼ばれている。戦国中期の雲南呈貢天子廟の貯貝器⁴⁴⁾にも同様の文様があり、旋渦文と称している。他に、前漢晩期の四川会理で鈕鐘に、繰り返すS字状に体を折り曲げた蛇が各面に二匹ずつ左右対称に並べられた例があり⁴⁵⁾、流水文のように見える。銅鼓には見られない。

僅かな種類ではあるが、銅鐸にとっては主要な幾何学文が中国南方青銅器ではどのように現れているか概観した。以上の範囲からは、銅鐸の幾何学文の意匠は、四川・雲南の青銅器との共通性が多く、銅鼓とはそれほど強い結び付きはないということが判明した。ここまでの範囲からは、銅鐸の幾何学文は、むしろ銅鼓も含めた四川・雲南の青銅器と親近性があるという理解にたつのが自然ではないだろうか。

(3) 絵画文における船文について

絵画文には様々な種類があるが、ここでは銅鐸と銅鼓の双方に登場する船文を取り上げる。

船文のある銅鐸は唯一例しかない⁴⁶⁾。II-1式の井向1号銅鐸^{いのむかい}である。その船は、船首も船尾も急角度で立ち上がっているが、船首が船尾より大きく高く立ち上がり、間を繋ぐ船体は大体水平である (図22)。この特徴ある形の船は弥生土器にも見られることから、この形は偶然の産物ではなく、そういう形の船が確かにあったことを窺わせる。

この船の形に似た例を銅鼓胸部に探してみると、広西貴州羅泊湾M1:10号銅鼓⁴⁷⁾ (図23) が挙がってくる。この船の種類は双身船であると考えられている⁴⁸⁾。現在の南洋の双身船として紹介されている図 (図24) を見ると、井向1号銅鐸の船の形に非常によく似ている⁴⁹⁾。この銅鐸の船は、双身の表現はないものの、先に挙げたその特徴は、丈が低い横長の胸部に押し込められている羅泊湾M1:10号銅鼓の船文よりはるかに南洋の双身船の形に近い。井向1号銅鐸の特徴ある船文と非常によく似た表現は、漢代の広州埴刻画⁵⁰⁾ (図25) にも認められる。

銅鼓では、写実的な表現の船文は石寨山型銅鼓のみにあり、戦国後期に始まり、極盛期は前漢前期である⁵¹⁾。この銅鼓の船文には様々な種類の船文があるが、双身船は中で最も多い⁵²⁾。その表現は写実的とは言いが、それは石寨山型銅鼓より後の銅鼓の図案化が著しく進んだそれと比較してのことである。元来、双身船は単身船に比べ、写実的にそれと分かる表現は簡単に

はない。図案化の方向に向かいやすい傾向があり、それがどの程度であるかで表現上の相違が出るものである。こういう事情があって、双身船は注意深く見ないと単身船と間違いやすい。銅鼓の双身船の中でも双身船であることがすぐに分かる例の一つが、先に挙げた広西貴州羅泊湾M1：10号銅鼓の胸部の船である。これに比べると、雲南晋寧石寨山M14：1号銅鼓のそれ(図26)は図案化がより進んでいて慣れていないと判断しにくい。しかしどちらかという、写実的表現とされる石寨山型銅鼓でも、後者の表現の方が例数が多いように見受けられる。

つまり、この船文を通して言えることは、次の点であろう。日本の銅鐸の船文は、石寨山型銅鼓の船文に最も多いとされる双身船だとすると、この点で銅鼓と共通性がある。その表現は、銅鼓の中では石寨山型銅鼓中でもより写実的な広西貴州羅泊湾M1：10号銅鼓のそれに近く、また広州博刻画という全く別の素材に表された船の形に更に近かった。銅鐸の船文の銅鼓の船文との結び付きは間接的である。結局、井向1号銅鐸の船文は、石寨山型銅鼓や広西・広東あたりの当時の中国南方世界と共有している部分があることを示唆する標識としての役割を果たしているということであろうか。

おわりに

一般に、日本の青銅器は朝鮮半島を経由した東北アジア系であると言われているが、以上からは、銅鐸に関してはその文様や装飾法に、中国南方の青銅器との共通点が散見された。

これまでも日本銅鐸の雲南銅鼓との関係は早くから指摘されてきた⁵³⁾。それは双方共資料が不足する時期での指摘に端を発しているものである。その後日中の科学的考古発掘による調査研究には目覚ましい進展があり、事情は好転している。しかし、銅鐸と銅鼓の装飾の関係についての認識には、必ずしもこの点が生かされていないのではないだろうか。本稿では、簡略ながら銅鼓も含めた新しい資料から得た初歩的な結論として、次のような見解を得るに至った。

銅鐸の装飾は、銅鼓と縦横の幾何学文帯による構成である点では共通するがそれは他の器種にも見られたこと、また幾何学文は銅鼓にはない文様も使用されているがそれらの文様は他の器種には見られたこと、などから銅鼓とだけ深い関係があるのではない様子が浮かび上がってきた。ここで、これまでに挙げた各種の青銅器の出土地を見てみると(地図参照)、殆どは万家壩型銅鼓及び石寨山型石寨山系銅鼓の分布地域と重なり、また少数のものが越族青銅器の分布地域と重なっていることが分かる⁵⁴⁾。これに上記の船文における結論を加えると、本稿の範囲からは、銅鐸の装飾は、むしろ戦国から前漢の銅鼓の分布地域、即ち長江上流域の雲南・四川南部や東南の広西などの地の青銅器文化と近い関係があり、また越族の青銅器文化とも共有する部分があり、沿海の中国南方地域の世界とも無縁ではないということであろう。

銅鐸と中国南方青銅器との装飾法や文様の意匠におけるこうした親近性の発生は、具体的にはどのようにしたら可能であろうか。類似した文様を有する小型の青銅器の伝来、鑄造工人の渡来などが考えられる。弥生時代の青銅器鑄造現場の性格を詳細に研究した結果によると、弥生中期前半までは日本での青銅器の鑄造は朝鮮半島からの渡来人によって行われていたことが指摘されている⁵⁵⁾。それは工人の生活跡から出土した土器から導き出されている。そうすると

南からの工人達は、朝鮮半島で土着化し、その後渡来したことも考えられる。その場合は朝鮮半島にも痕跡がある筈である。

ここで朝鮮無文土器時代の有名な防牌形銅器⁵⁶⁾に触れておきたい。この器物は、その文様から農耕祭祀にかかわる儀器であると推測されているが、人物の特有の表現(図27)は、石寨山型銅鼓等に施されている人物表現⁵⁷⁾(図28・29・30)と酷似している。この防牌形銅器は、朝鮮では異形青銅器と分類される一連の器物の一つである。これらの異形青銅器は、紀元前4世紀から紀元前3世紀頃、忠清道に分布し、突然現れて短期間で消えていったとされている⁵⁸⁾。これらの諸点は、これらの青銅器が朝鮮半島本来のものではなく、外から入ってきた要素であること、またその製作にはそうした要素の関与があったことを暗示しているように思える。

銅鐸の装飾文様の源流探索の一環として、本稿では中国南方青銅器の装飾とのごく初歩的な比較を試みたものである。ここではおおよその日中間の年代的な関係には留意したが、歴史的背景などは度外視しており、大きな年代的枠組みの中での類似現象をつき合わせることにのみを徹した。その結果おおよその傾向を得たが、これを手懸りに、今後は歴史的背景も視野に入れ、この問題に関心を持ちつづけてゆきたいと考えている。

付記

本稿は、2001年2月末、北京大学考古文博院で開催された“長江流域青銅文化国際学術討論会”で口頭発表した際の原稿を基に成稿したものである。口頭発表と本稿の間にはこのシンポジウムの論文集に向けて提出した一篇があり、これに補筆修正を加えるかたちをとった。シンポジウム関連の場合は、銅鐸は、長江流域の青銅器と日本の青銅器文化という大きな枠組みの中で一例として取り上げたものであり、副題に置いたが、本稿では銅鐸を前面に出し主題とした。図や地図も本稿で初めて加えた。

註

- 1) 片岡宏二『弥生時代渡来人と土器・青銅器』、雄山閣出版、1999年、172頁、202-39頁。
- 2) 1. 井上洋一「銅鐸起源論と小銅鐸」『東京国立博物館紀要』第28号、1993年
2. 春成秀爾「銅鐸の起源と年代」『論争と考古学』、名著出版、1994年
3. 高倉洋彰「銅鐸の起源と文化」『戦後50年古代史発掘総まくり』(アサヒグラフ別冊4月1日号)、朝日新聞社、1996年
- 3) 井上洋一 註2-1では、起源問題に絡めて文様について高い関心が示され、幾つかの有文の近似した器形の青銅器が提示されている。ただ、この論考の帰結と連動して最後に触れるものであり、検討まではなされていない。
- 4) 井上洋一「日本列島における金属器の黎明」平尾良光編『古代東アジア青銅の流通』、鶴山堂、2001年、46頁。
- 5) 片岡宏二 註1文献、172頁。
- 6) 平尾良光編『古代青銅の流通と鑄造』、鶴山堂、1999年、2頁。
- 7) 王建新『東北アジアの青銅器文化』、同成社、1999年、191・192頁。
- 8) 三木文雄『日本出土青銅器の研究』、第一書房、1995年、本文編541-88頁から得た。
- 9) これらの欠孔や切り欠きは、一般的に、鑄型の中型と外型の間の壁厚分の空隙を確保するための土製の型持たせの跡と考えられている。但し、当然ながら、実際に音を出せば音響効果に

も関係するもので、むしろ、そうした効果のための欠孔や切り欠きだとする意見もある。(久野邦雄『青銅器の考古学』, 学生社, 1999年, 69-73頁に拠る。久野氏は、中型を外型の外で固定し、型持たせ孔を持たない方法で鑄造実験をし、音響の測定をして結論。)

- 10) 佐原真「銅鐸の鑄造」『世界考古学大系』第2巻日本II, 平凡社, 1960年, 92-104頁。
- 11) 平尾良光編 註6文献, 平尾良光・鈴木浩子「弥生時代青銅器と鉛同位体比」, 165頁・172頁, 図8に拠る。即ち, 165頁から銅鐸の型式と対応世紀を, 172頁, 図8から銅鐸の型式と対応する弥生時代の大体の時期区分を得, 総合して求めた。
- 12) 銅鐸の装飾法(文様の配置状況)及び文様の種類については次の文献2-4を参考にした。またI-IV式の各式における横帯文・流水文・袈裟襷文の出現状況などについては, 次の文献の1から得たが, 主要な新出土例を文献2-4で補った。
 1. 佐原真・春成秀爾「銅鐸出土地名表」『考古学ジャーナル』No.210, 1982年11月
 2. 三木文雄 註8文献
 3. 国立歴史民俗博物館編『歴史フォーラム 銅鐸の絵を読み解く』, 小学館, 1997年
 4. 佐原真・春成秀爾『出雲の銅鐸 発見から解説へ』, 日本放送出版協会, 1997年
- 13) 井上洋一 註2-1, 58-63頁。ここでは東京国立博物館No.35509銅鐸を中でも最古とし, 横帯文は袈裟襷文状の不定形な文様から定型化して得られたとする。
- 14) 国立歴史民俗博物館編 註12-3, 「絵画銅鐸一覧」231-33頁より。
- 15) 国立歴史民俗博物館編 註12-3, 37頁。
- 16) ・26) 1. 広西壮族自治区文物工作隊「広西西林県普駄銅鼓墓葬」『文物』1978年9期。
2. この銅鼓の年代を導いた普駄銅鼓墓の年代は次に従った。童恩正「近年来中国西南民族地区戦国秦漢時代の考古発掘及其研究」童恩正『中国西南民族考古論文集』, 文物出版社, 1990年, 146頁
- 17) ここまでの銅鼓についての理解は次の文献に基づいた。
 1. 雲南省文物工作隊「楚雄万家壩古墓群発掘報告」『考古学報』1983年3期, 347-81頁
 2. 蔣廷瑜『古代銅鼓通論』, 紫禁城出版社, 1999年
- 18) ・24) (器号M41:103) ①中国青銅器全集編輯委員会編『中国青銅器全集』第14巻 滇・昆明, 文物出版社, 1993年, 図版42 ②昆明市文物管理委員会「呈貢天子廟滇墓」『考古学報』1985年4期。
(以下, 註における青銅器の具体例記載は, 出土年・出土地・器名 ①カラー写真図版また鮮明な図掲載文献, ②出土報告文献の順とする。本文中に器物を特定できる記述がある場合は器名までの記載は一切省略を原則。文献は一方のみ提示の場合, ①か②を付して文献名を記載。)
- 19) ・38) ・42) ①『中国青銅器全集』14, 図版3。
- 20) 例1. 雲南江川李家山出土 鼓形貯貝器 ①玉溪地区行政公署編『雲南李家山青銅器』, 雲南人民出版社, 1995年, 図版14。
例2. 1956年雲南晋寧石寨山出土 戦争場面貯貝器 ①『中国青銅器全集』14, 図版21 ②雲南省博物館編『雲南晋寧石寨山古墓群発掘報告』, 文物出版社, 1959年。
- 21) 大局的に見れば, 中原青銅器文化は東アジア各方面の青銅器文化の源流であるから, それらの青銅器文化はすべてその影響下にあったと言える。ここではそこまで普遍化した現象は影響として捉えていない。万家壩型銅鼓腰部底辺に施された勾連雷文にしても, 中原青銅器文化の要素であるが文様意匠として普遍化したものであり, 特に制約された形での影響下という範疇ではないと考えている。
- 22) 王大道・肖秋「論銅鼓起源于陶釜」中国古代銅鼓研究会編『古代銅鼓學術討論會論文集』, 文物出版社, 1982年, 表1, 33頁。
- 23) ・30) ・34) 例1. 1976年雲南祥雲検村出土 編鈕鐘 ①『中国青銅器全集』14, 図版209 ②大理州文物管理所 祥雲県文化館「雲南祥雲検村石椁墓」『文物』1983年5期。

- 尚、綾杉文帯は、本稿図19では手抜きしたか誤りで表されていない。連続渦文帯の上下にある二三本の弦文（直線文）が本来は綾杉文なのである。①では明瞭、②の図版2、5でも不鮮明ながらそれと分かる。
- 24) 註18) 参照。
- 25) ・57) 例1. 1900年雲南広南阿章寨出土 銅鼓 ①『中国青銅器全集』14, 図版206-08。
- 26) 註16参照。
- 27) ・37) ・45) 1977年四川会理転場壩出土 編鈕鐘-2号鐘・3号鐘 ②陶鳴寛「四川会理出土一組編鐘」『考古』1982年2期。
- 28) ②雲南省文物工作隊 註17-1。
- 29) 王大道・肖秋 註22文献, 図1, 32頁。
- 30) 註23参照。ここでは、斜格子文は帯状ではなく、充填文として使用。
- 31) ・40) 1992年四川茂県牟托村出土 太陽文鐃鐘 ①『中国青銅器全集』第13巻 巴蜀, 文物出版社, 1994年, 図版192 ②茂県羌族博物館・阿壩藏族自治州文物管理所「四川茂県牟托一号石棺墓陪葬坑清理簡報」『文物』, 1994年3期。
- 32) ②庄錦清・林華東「福建南安大盈出土青銅器」『考古』1977年3期。
- 33) ②滕引忠「横峰出土春秋戦国銅器」『江西文物』1991年2期。
- 34) 例1. 註23参照。例2. 1964年雲南祥雲大波那出土 鐘 ①『中国青銅器全集』14, 図版211 ②雲南省文物工作隊「雲南祥雲大波那木椁銅棺墓清理報告」『考古』1964年12期。
- 35) ・44) 1979年雲南呈貢天子廟滇墓33号墓出土 五牛蓋銅貯貝器（器号M33:1）②『考古学報』1985年4期, 534頁, 図29。
- 36) 1956年雲南晋寧石寨山出土 編鐘 ①『中国青銅器全集』14, 図版213/童恩正 註16-2文献, 137頁, 図2, 3 ②『雲南晋寧石寨山古墓群発掘報告』（①の前者の文献では編鐘一揃いの図であり、個々の文様の意匠は不明。却って後者の文献が線描きで明瞭。②の図版が最も有効）。
- 37) 註27参照。
- 38) 註19参照。
- 39) 1893年ベトナム河南省平禄県玉楼郷で発見された石寨山型東山系の玉楼鼓には、腰部上辺にハッチングが施された複合鋸歯文帯が見られる（註17-2, 56-58頁に拠る）。
- 40) 註31参照。
- 41) 楊玠「雲南牟定出土一套銅編鐘」『文物』1982年5期。
- 42) 註19参照。
- 43) 1972年雲南江川李家山出土 五牛線盒2点（器号23:6, 24:35）・立牛線盒1点（18:4） ①『中国青銅器全集』14, 図版40（24:35）・43（18:4） ②雲南省博物館「雲南江川李家山古墓群発掘報告」『考古学報』, 1975年2期。
- 44) 註35参照。
- 45) 註27参照。
- 46) 銅鐸の船文についての理解は、次の文献から得た。1. 註12-3, 94・95・101・186・187頁。2. 国立歴史民俗博物館編『銅鐸の美』, 毎日新聞社, 1995年, 60・61・188・189頁。
- 47) 広西壮族自治区博物館編『广西貴県羅泊湾漢墓』, 文物出版社, 1988年, 図22。
- 48) 陳麗瓊「銅鼓船文補釈」『中国銅鼓研究会第二次学術討論会論文集』, 文物出版社, 1986年, 264頁。
- 49) 石鐘健「銅鼓船文中有没有過海船」『古代銅鼓学術討論会論文集』, 176頁によると、双身船は古代長江流域で広範に使用されていたこと、その分布範囲も広く使用時期も長いこと、現在も南洋と南太平洋では使用されているとある。銅鼓・銅鐸と現在の船では余りにも時間差のある例の比較であるが、その形を見ると違和感がなくなるほど似通っている。
- 50) 1. 林巳奈夫編『漢代の文物』京都大学人文科学研究所, 1976年, 七 乗物367-69頁・371

頁／乗物挿図7-83(挿図155頁)。

2. 王冠倬編著『中国古船図譜』, 三聯書店, 北京, 2000年, 図66(66頁)。

二書とも掲載の図は同じ図である。この広州埗刻画の船の種類について。双身船かどうかは楼船かどうかが問題となる。何故なら、双身船必ずしも楼船ではないようであるが、楼船はその構造上、双身船の形を採ると考えられている(石鐘健 註49・林巳奈夫 本註1, 368-69頁に拠る)。2. では楼船とするが、1. では楼船ではないとする。後者の根拠は、船上にあるべき楼閣が単に船と楼閣を重ね描きしたような表現上の不自然さ、また楼船の例として考えられる鏡背文中のそれと形が異なることが大きな原因である。筆者は、表現上の問題は単なる手抜きではないかと思う。船の形については、2. では漢代の楼船の図像には上記の鏡背文とこの埗刻画の二つがあると、楼船としている。その形が一種類ではなかったという捉え方である。2. に従えば、広州埗刻画の船は楼船であり、双身船であることになる。更に形の近似から双身船の中でも南洋系ではないかと推測される。

51) 蔣廷瑜 註17-2, 152頁。

52) 陳麗瓊 註48。

53) 鳥居龍蔵「我が国の銅鐸は何民族の残した物か」『人類学雑誌』38巻4号(総432号), 1923年, 137-52頁。

54) 石寨山型石寨山系銅鼓の分布地域は、北限は四川南部、東は貴州の西部から広西の西部・南部・東北にかけた地域まで。中心地は雲南中部。出土例が非常に多いのは雲南・広西。(東山系は、ベトナム北部以南・タイ・マレーシア・インドネシアなど。) 万家壩型銅鼓の分布地域は、雲南滇池以西から騰冲までの一帯。滇池(昆明と呈貢の間)と洱海(祥雲の西北)の間に集中。ほかに広西西部にも出土例あり。タイやベトナム北部も同様。(以上は、蔣廷瑜 註17-2, 51頁・101頁に拠る。) 越族青銅器文化の分布地域は、長江中流域・下流域以南、つまり、湖南・湖北南部・江西・江蘇南部・上海・浙江・福建・広東・広西東部。(何介鈞「古代越族的青銅文化」『湖南先秦考古学研究』, 長沙, 岳麓書社, 1996年, 179-83頁に拠る。)

図20で挙げた太陽文罽鐘はその出土地が四川茂県とある。石寨山型銅鼓の分布の北限をはるかに北上した地点であるが、註31②に拠ると、この罽鐘を出土した遺跡全体に滇文化の要素があり、この罽の太陽文も滇文化と同じであるとしている。つまり、この罽鐘は石寨山型銅鼓の盛んな時期の雲南地域の青銅器文化の延長線上にあると見ることが出来るが、その出土地点が銅鼓の一般的な分布範囲を大幅に超えた例である。

55) 片岡宏二 註1文献, 149-201頁。

56) 紀元前3世紀頃(『週刊朝日百科世界の美術』101, 朝日新聞社, 1980年, 3頁), 忠清南道大田市槐亭洞出土(『世界美術大全集』東洋編10, 小学館, 1998年, 120頁, 挿図66のキャプションより), ソウル, 韓国国立中央博物館蔵。“農耕文青銅器”と称することが多い。

57) 例1. 註25参照。例2. 晋寧石寨山出土 銅鼓形双蓋銅貯貝器M12:1第一層器蓋 ①『中国青銅器全集』14, 図版214(この図版では“籜”と記載。) ②『雲南晋寧石寨山古墓群発掘報告』。例3. 雲南晋寧石寨山銅鼓残片 馮漢驥「雲南晋寧出土銅鼓研究」『文物』1974年1期, 57頁。

58) 防牌形青銅器という名称, 防牌形青銅器と異形青銅器の関係, 異形青銅器の出現・消滅状況等々については, 早乙女雅博「先史・古代の工芸」『世界美術大全集』東洋編10, 119-20頁に拠った。異形青銅器の存続年代は同文献では, 明記しているわけではないが, 文脈から判断した。

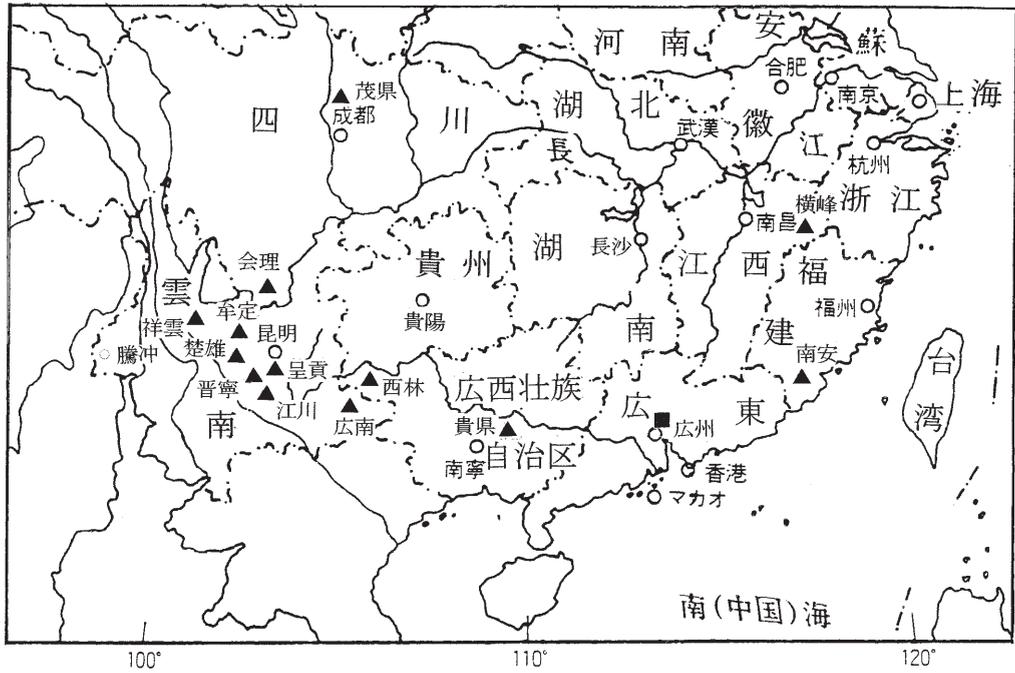
図・地図出所

図1 久野邦雄1999(註9括弧内引用文献), 35頁, 朝鮮小銅鐸, 2

図2 『世界考古学事典』上, 平凡社, 1979年, 769頁

末房由美子

- 図3 『銅鐸の絵を読み解く』, 190頁, IV 銅鐸絵画集成 資料5
- 図4 三木文雄1995,169頁, 本文編第II部挿図8
- 図5 三木文雄1995,357頁, 本文編第II部挿図125
- 図6 『文物』1978年第11期, 2頁, 図2
- 図7 三木文雄1995,329頁, 本文編第II部挿図107
- 図8 『銅鐸の絵を読み解く』, 193頁, IV 銅鐸絵画集成 資料7
- 図9 三木文雄1995,385頁, 本文編第II部挿図146
- 図10 『中国青銅器全集』14, 5頁, 挿図4
- 図11 同上
- 図12 『考古学報』1983年3期, 368頁, 図30, 5
- 図13 蔣廷瑜『古代銅鼓通論』, 50頁, 図13, 1
- 図14 蔣廷瑜『古代銅鼓通論』, 51頁, 図14, 1
- 図15 『中国青銅器全集』14, 5頁, 挿図4
- 図16 『文物』1978年9期, 47頁, 図4, 上
- 図17 『考古学報』1985年4期, 523頁, 図16, 1・2
- 図18 『雲南李家山青銅器』, 5頁, 図2
- 図19 『文物』1983年5期, 39頁, 図23
- 図20 『文物』1994年3期, 16頁, 図22,3
- 図21 『考古学報』1975年2期, 128頁, 図33, 5
- 図22 『銅鐸の絵を読み解く』, 101頁, 図133, ⑤B
- 図23 『広西貴州羅泊湾漢墓』, 26頁, 図22, 3
- 図24 『古代銅鼓學術討論會論文集』, 176頁, 図3
- 図25 『中国古船図譜』, 66頁, 線図66
- 図26 『中国銅鼓研究会第二次學術討論會論文集』, 252頁, 図4
- 図27 『世界美術大全集』東洋編10, 105頁
- 図28 『中国青銅器全集』14, 171頁, 図版207
- 図29 『雲南晋寧石寨山古墓群発掘報告』, 119頁, 図版119
- 図30 『中国銅鼓研究会第二次學術討論會論文集』, 254頁, 図7, 1
- 地図 河野通博 青木千恵子 訳『現代中国地誌』, 古今書院, 1988年, 3頁, 図1の一部
分を使用, 末房補正及び関係地点記入



地 図 本稿で取り上げた中国青銅器出土地点
▲ 青銅器出土地点 (■ 青銅器以外の遺物出土地点)

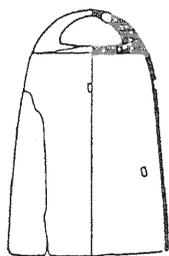


図1 忠清南道槐亭洞鐸

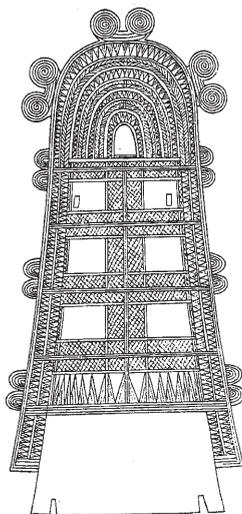


図2 滋賀県小篠原1号銅鐸
IV-5式 最新段階

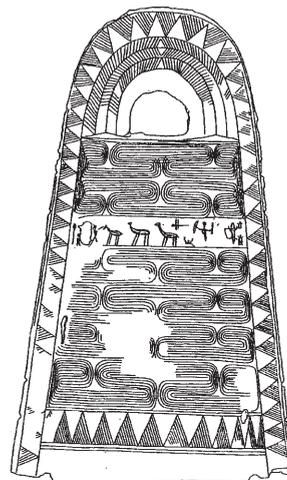


図3 神戸市神岡1号銅鐸
流水文系

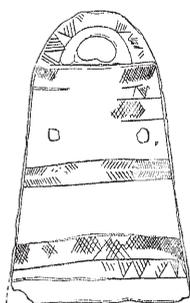


図4 島根県荒神谷
5号銅鐸
横帯文系

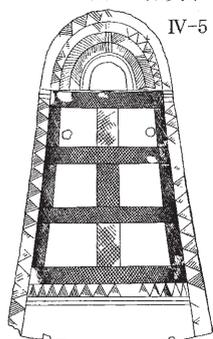


図5 神戸市神岡8号銅鐸
袈裟摺文系

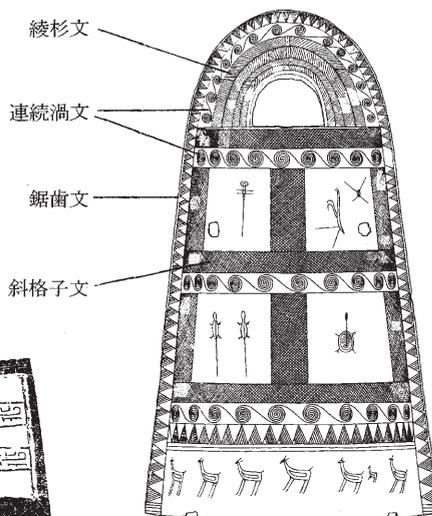


図7 銅鐸の主要な幾何学文
(神戸市神岡4号銅鐸)



図6 秦公甲鐘

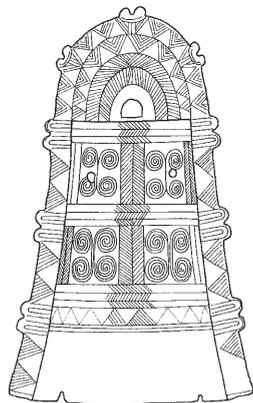


図9 南河内郡鹿谷寺跡出土銅鐸



図8 滋賀県新庄銅鐸

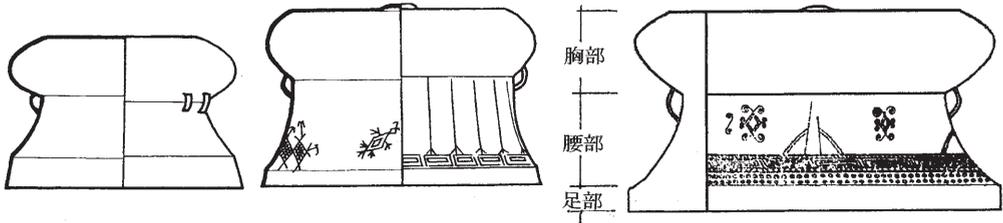


図10 万家壩型銅鼓Ⅰ式

図11 万家壩型Ⅱ式

図14 万家壩型Ⅳ式

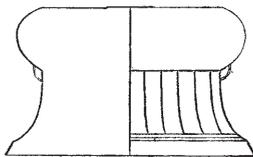


図12 万家壩型Ⅲ式

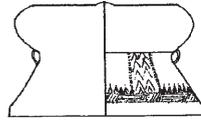


図13 万家壩型Ⅲ式

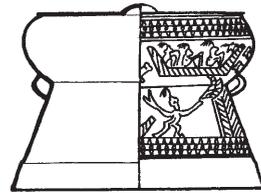


図15 石寨山型銅鼓

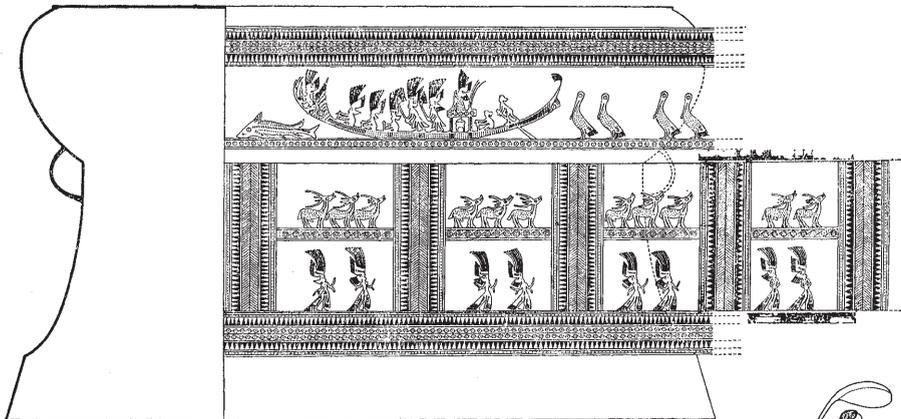


図16 広西西林銅鼓

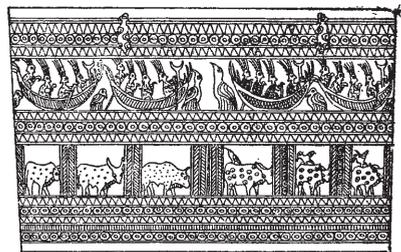
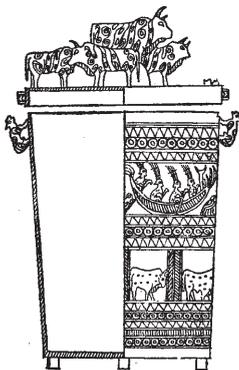


図17 五牛桶

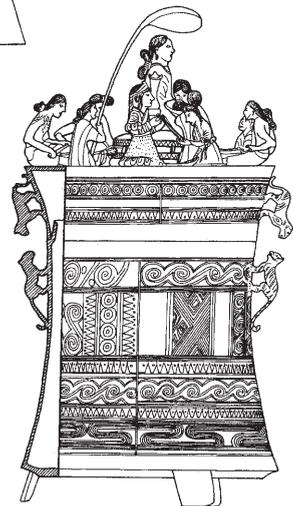


図18 紡織貯貝器



図19 雲南祥雲檢村鈕鐘

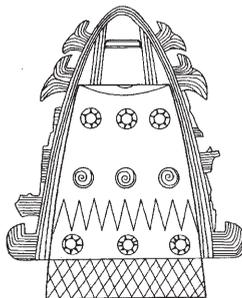


図20 太陽文鐃鐘

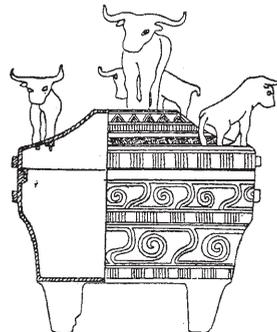


図21 五牛線盒
(23:6)

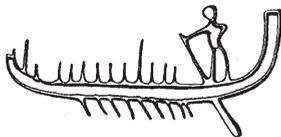


図22 井向1号銅鐃
いのむかい

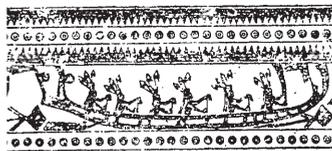


図23 羅泊湾 M1:10 号銅鼓

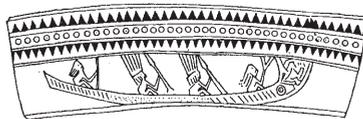


図26 晋寧石寨山 M14:1 号銅鼓

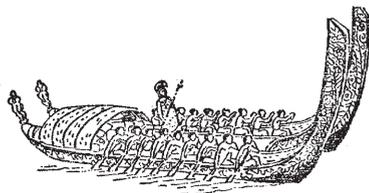


図24 南洋の双身船



図25 広州埧刻画

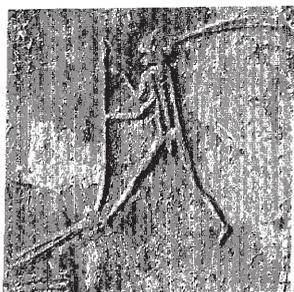


図27 防牌形青銅器



図28 雲南広南銅鼓



図29 晋寧石寨山 M12:1



図30 晋寧石寨山銅鼓残片